



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「も」の文法的特性と語用的機能に関する研究 [全文の要約]
Author(s)	稲吉, 真子
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13836号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78705
Type	doctoral thesis
File Information	Mako_Inayoshi_summary.pdf



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 稲 吉 真 子

学位論文題名

「も」の文法的特性と語用的機能に関する研究

本研究は、「も」の文法的特性と語用的効果に関する研究の研究題目のもと、日本語の助詞「も」を対象に、統語論的、語用論的双方の観点からの考察を行ったものである。

「も」は古くは日本最古の歌集である『万葉集』の中でも用いられており、特段目新しい形態素ではない。しかし、文法的な研究が本格的に行われ始めたのは近代以降であり、今なおその研究は盛んに行われている。これまでの研究を俯瞰すると、「も」は、「累加」という意味から説明されることが多く(沼田 2009, 日本語記述文法研究会 2009a など)、その意味は一般的に、「文中のある要素をとりたて、同類のほかのものにその要素を加えること」であるとされる(日本語記述文法研究会 2009a:5)。しかし、同類の他の要素が形式的に明示されておらず、どのように累加関係が成立しているのかが不明瞭である場合にも「も」の使用が成立しており、従来の定義では説明しきれない使用例も見受けられる。そこで本研究では、「も」の包括的な考察を試み、その基本的な意味を、加藤(2006a:97)で挙げられている「同一範疇判断」を示すことと設定し、さらにそれらを「意味的同一範疇判断」と「語用的同一範疇判断」に分類することで問題の解決を試みた。このように、第4章以降から第7章までは「文法的特性に関する考察」と称し、主に「も」の文法的側面に着目した考察を行っている。その上で、第8章から第10章までは、「語用的機能に関する考察」と称し、「も」の使用上に生じる選好や効果など、より実際の使用に着目した考察を行っている。以下にて、各章ごとの内容について具体的にまとめる。

第1章では、「研究対象と研究目的」について述べた後、「本論文の構成」について述べている。

第2章では、先行研究を概観し、「も」の位置づけについてまとめている。この中では、まず、近代以降の主要な文法論である大槻文法、山田文法、松下文法、佐久間文法、橋本文法、時枝文法を参考に、それらにおいて、「も」がどのように扱われているかについて、助詞との位置付けや意味の観点からまとめた。その後、近代の学校教育ではどのように扱われているのかについて、教科書を参考にまとめた。その結果、学校教育においては「係助詞」や「副助詞」に分類されていることが分かった。次に、現代の日本

語文法研究ではどのような位置づけになっているのかについて、意味および統語的な観点からの先行研究と、不定他者に関する先行研究についてまとめた。その前段階として、「も」が属する助詞のカテゴリーについても言及した。「も」の品詞区分に関しては多くの立場があり、先行研究の立場を整理すると、従来の係助詞とするもの、係り結びが消失した現代においては副助詞とすべきであるとするもの、その両者の性質があるとするものの三者に分けることができるとまとめた。その上で、それらの中には、丹羽(2001, 2006)のように、「も」の品詞区分について、他の品詞区分に疑問を呈する先行研究も多くあることについて触れた。これらの多くは、より大きな問題提起として、「とりたて詞」という品詞を設定することの問題について論じている(澤田 2000, 多田 2012 など)。「とりたて詞」の設定意義についての問題を扱う先行研究は大きく、これらはさらに、とりたて詞の問題を挙げその存在自体を批判的に捉えるものと、同じくとりたて詞の問題を挙げ、その存在は認めるものの定義の再考を訴えるものの二者に分かれる。いずれにせよ、「とりたて詞」という品詞区分と、それに伴う定義、もしくは対象項目が曖昧であることに起因する問題であることを指摘した。その上で、本研究では、現代では消失した係助詞が副助詞に統合したと捉え、「も」の区分については「副助詞」という用語を採用することとした。

意味および統語的な観点に基づく考察では、代表的なものとして、沼田(1986, 2000, 2009)、日本語記述文法研究会(2009a)、青柳(2006)を取り上げている。

もう一方の「不定他者に関する研究」の「不定他者」とは、主に沼田(1986, 2000, 2009)の中で用いられている用語であるが、これは「も」の用例のうち、同類の他の要素が不明瞭であるものとして捉えた。この「不明瞭」という位置づけには、「も」の形式的な表示の有無が大きく関与している。本研究においても、このような用例に関する考察は主要な位置づけにあるため、沼田(1986, 2000, 2009)に見る残された課題は、問題提起として重要なものとして扱った。沼田(1986, 2000, 2009)以後の「不定他者」に関する研究としては、下位分類や再分類により、「不定」たる物事を解明しようという試みが多く、その例として、澤田(2007)、定延(1995)、中尾(2008)などを取り上げた。しかし分類を細かくしても、「も」の意味が明確になるわけではなく、むしろ複雑化していることを指摘した。それを踏まえ、「も」が何に同一性を見いだしているのかを決定するに当たっては、文脈が大きく関与しており、同じ文を見ても意味が一義的ではないことを指摘した上で、「も」の基本的な用法である「累加」をとらえ直す必要があることを指摘した。この意味を論じるに当たっては、意味的、語用的性質の双方が関与しており、両者の観点から包括的に考察を行うべきであるという本研究の立場をここで改めて明確化した。

第3章では、予備的議論として、本研究の議論に入るにあたり必要になる概念や枠組みについて整理している。これらは大まかに、「言語の特性と言語処理に関与する議論」と「言語の運用と対人関係に関与する議論」に分けており、その中で先行研究をもとに

議論をまとめている。

第4章では、「も」の形態的な特性について論じている。この中では、「も」の品詞分類や形態的特性について整理しており、形態的特性に関しては、各品詞と結合した際の統合の仕方や、複合助詞を形成する際の特徴などについてまとめた。これらの複合関係を考察していく中で、副助詞とされるものの中には、名詞性が強いものやそうでないものが混在しており、それにより名詞性が強い形式は複合時に前方に出現することを指摘した。

第5章では、「も」の基本的な意味である同一範疇判断に関する特性と制約に関する考察を行っている。従来「も」の基本的な用法は「累加」とされてきたが、それを加藤(2006a, 2017b)の「同一範疇判断」から捉え直し、本研究ではそれをさらに「意味的同一範疇判断」と「語用的同一範疇判断」の2種類に分けた。「意味的同一範疇判断」は、「も」が後接するものが焦点(focus)となり、それに対応するパラディグマティックな関係にあるものを同一範疇のものとして見なすものであると定義し、「語用的同一範疇判断」は、同一範疇が何らかの共通性に基づくもので、入れ替えが不可能であるもの、または照応先が言語的に明示されておらず、同一範疇判断がつきにくいものであると定義した。これをもとに具体的な使用例を対象に、どのような要素間であれば同一性を担保できるかをパラディグマティックな関係性に着目しながら考察した。意味的同一範疇判断は、包摂関係の中の具体的要素とそれを取りまとめている集合全体とは同一範疇と見なせない一方で、語用的同一範疇判断は前件と後件において話し手の評価の一致が見られれば、どのような包摂関係をなしているかについては問題にならないという両者の違いを指摘した。

第6章では、照応先が形式上に明示されていなくとも使用できる用法の一例として、数量詞に後接する「も」を考察している。この中では、基本的な用法を肯定文と否定文の場合に分け考察し、それに関連して、他の数量詞に接続する副助詞との比較や、疑問詞に接続する場合の用例に関しても取り上げた。数量詞に後接する「も」には、命題の成立が話し手の想定を下回る、もしくは上回る事象であったことを示す機能があり、それにより話し手がその値に対しどのような評価を持っているかを副次的に伝達する点が、他の助詞と比較し、特徴的な点として挙げられることを新たに指摘した。

次に、数量詞に後接する用例に関連して、語彙的尺度に関与する「も」の用例について、「尺度」の観点を取り入れて考察を行った。数量詞に後接する「も」は数字により量的値が明確である一方で、数量詞に後接する「も」と同様の機能を持ちながらも、後接対象が語彙の場合は、世界知識とその場の状況文脈によりアドホックに形成される「尺度」という観点を導入する必要があると主張した。この語彙的尺度は、数値のように一次元的な尺度ではなく、文脈によって柔軟に変わりうるものであると結論付けた。

第7章では、「も」の位置の繰り上げ現象について考察している。この現象も日常的な運用において、しばしば見られる現象であるが、形式と発話内容に齟齬が生じるにも

関わらず、なぜ位置の繰り上げが選好されるのかについて、①解釈処理の促進、②解釈の増加と文脈の利用、③形式の複雑化回避と簡略化の 3 点の仮説に基づき考察を行った。1 点目の要因は解釈に生じる負担を軽減させるという点でその他の要因にも関わるものであるため、これを繰り上げ現象の主因であると考ええる。加えてこの 1 点目の要因に関しては、解釈処理の促進の他に、相手の立場に対し同調的であるという姿勢を示す談話的機能が生じると論じた。なお、これら 3 点の要因について、①と②については、解釈処理における内容理解を促進するものであり、主に聞き手側に関与する要因であったが、③に関しては、産出する文自体の単純化を図るものであるため、これについては話し手側の負担軽減に関わる要因であるとした上で、「も」の繰り上げ現象における選好性については、「解釈処理を促進させたい」という聞き手側に関与するものと、「発話の複雑化を回避したい」という話し手側に関与するものの、双方の要因により生じるものであり、それぞれの要因は排他的なものではなく統合的なものであると主張した。

そして最後に、繰り上げ現象が生じにくい場合について検討した。1 点目は場面の改まり度が高い場合であり、形式上は位置を繰り上げて使用することも可能ではあるが、フォーマルな場ではあまり好まれないことを指摘した。これは、話し言葉よりも規範度の高い、書き言葉においても繰り上げ現象が生じにくいことから示唆される。2 点目は形式上の問題について触れ、転成名詞化した語彙に「も」が後接した場合、位置を繰り上げると、尺度性の意味が曖昧になることから、そのような場合には繰り上げが選好されないことを指摘した。

第 8 章では、句の形成に関与する「も」として「ても」を対象に考察を行っている。従属節に出現し、動詞に後接する「も」について、「ても」の考察を中心に行うことにより、「も」との関連について考察した。まず、従来の、仮定的・逆接という意味を再検討し、仮定か事実かという判断は主節のテンスに関与するため、必ずしも仮定的であるとは言えないことを指摘した。また、従属句の表す条件には、絶対的に実現しない条件、必ず実現する未来の条件、未確定の未来の条件、進行中の条件、完了している条件の 5 つに分かれることができると指摘した。その中で、構造的な観点から考察すると、「ても」には、節の定義から外れ、句としての特性が見られる部分もあり、副詞句の一種であるとの見方もできることを指摘した。次に「ても」が複数回使用される「てもても文」について分析した。「ても」が他の条件に関わる形式とは異なり、複数の要素を羅列できるのは、「も」の同一範疇の要素を複数並べることができるという形態的特性が関与していることを指摘した。さらに意味的な観点から同一範疇判断との関わりを分析すると、前件の条件がいくら複数発生しようとも、主節の事態に変化はなく、前件と後件の関係性が同一である、つまり変わらないということを示す効果があると結論付けた。最後に「ても」には、後接する要素を焦点とするものと、命題全体を焦点とする例があり、文脈によりどちらの意味にもとれることを指摘した。加えて、「ても」には話し手の持つ前提を活性化させる機能があることを述べた。

第9章では、構造に関する考察、照応に関する考察の2点を軸に考察を行っている。まず「も」の構造関係について、どのような構文をなすかを「AもV。」「AもBもV。」「AもV、BもV。」「AがV。BもV。」の4タイプに分け、これらは1つの節の中に同一格の「も」が複数存在しているものと、複数の節があり、1つの節に「も」が1つずつあるものがあるとした。これは「も」が照応性を有することに起因し、照応の位置関係により、このようなバリエーションが生じているものと考え、さらにこの「照応性(anaphora)」を「前方照応」、「相互照応」、「無照応」の3つに分類した。なお、無照応には省略されているものと、照応先が存在しないものの2種類があるとして、それらは具体的な要素が復元可能か否かにより判断できるとした。さらに後者について具体的に論じ、「も」には照応先が形式上も本質的にも存在しないにも関わらず、「も」を使用することによりあたかも命題を支持する他の事柄が複数あるかのように扱う用法があり、そのような用法を「疑似的同一範疇判断」と定義した。「疑似的同一範疇判断」では、他の事柄が複数あるかのように扱うことで、話し手は自身の主張を強化する効果があるため、条件、原因・理由節と共に使用されやすいことを指摘した。なお、このような使用が許容されるのは、会話の協調の原理や、語用論的信頼性の原則の関与があるためであるとした。

第10章では、文脈の中で「も」がどのように使用されているのかについて論じている。形式的に明示されている場合は、形式文脈内に照応する要素があると考えられるが、形式的に明示されていない場合でも、状況文脈、知識文脈が照応先として成立する用例について、具体例をもとに考察した。従来は、共有が義務的である形式文脈に現れている「も」が主な考察対象であったため、それ以外の状況文脈や知識文脈に基づく「も」の使用に関しては雑駁にしか説明されていなかったが、3つの文脈の観点から分析することにより、様々な「も」の使用に対応することが可能であることを指摘した。

その上で、考察範囲を会話レベルまで拡張し、会話において「も」を使用することで、どのような効果が発生するかをポライトネスの観点をもとに検討した。まず、ポジティブポライトネス(positive politeness)においては「共感形成」という機能があり、ネガティブポライトネス(negative politeness)においては「ヘッジ(hedge)」として相手のネガティブフェイスの侵害を軽減する効果があることを主張した。前者は、会話参与者との間に同一性を担保することで生じる効果であり、後者は、聞き手の選択枝を拡張することで生じる効果であると言える。したがって、いずれの効果も、「も」の基本的な機能である同一範疇判断を示すことという意味から発生する拡張的機能であると位置づけることができる。

第11章では、本研究の全体の論について、簡潔にまとめている。その上で、本研究で扱いきれなかったものを今後の課題として2点挙げ、その後の研究の方向性を示している。1点目は、他の副助詞との比較の追求についてである。本研究においては、「も」を主たる対象とし、考察を進めてきた。しかし副助詞には、まだ様々なものがある。今

回考察してきたものがどれだけ汎用性があるのかについては、他の副助詞との比較により明らかにしたいと述べている。2 点目として、推意に関する考察の追求を挙げている。今回は主な枠組みを提唱し、尺度性に関わる用例の検証にとどまったが、これだけでは十分ではない。今後は、それ以外の用法についても、どのような推意が発生するかについて分析するべきであると考ええる。また、推意の枠組み自体についても考え直す必要がある。これは今回用いた枠組みがすべて英語における研究であるためである。本研究の考察対象である助詞のように、英語と日本語の中で違いが大きいものに関しては、枠組み自体を修正して用いる必要がある。以上のように、今後の課題として、大きく意味的な問題と語用的な問題の 2 点を挙げているが、今後の研究では、研究対象を拡大するとともに個別の課題についても論考を深め、さらなる「も」の統語語用論的考察の発展に貢献したいと考える。